

國學院大學學術情報リポジトリ

『平家物語』に描かれた武士像：
武士間の「つながり」から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 于, 君 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001591

『平家物語』に描かれた武士像

—武士間の「つながり」から—

The Image of Samurai Depicted in *Heike Monogatari*:

Using the Linkage between Samurai

于 君

キーワード：『平家物語』 武士像 つながり

关键词：《平家物语》 武士形象 纽带

要旨

『平家物語』において、仏教思想以外に、「忠」や「孝」といった儒教的な道德觀念が多く見られる。しかし、物語に語られた武士の姿を、仏教や儒教思想に還元させて考えるのは、武士の本質を見失う恐れがある。津田左右吉は、「戦記もの(軍記もの)」にこうした道德觀念が多出するのは、その作者が当時の知識人である僧侶であったからだと主張した上で、そうした武士の道德思想は、知識・学問からというより、武士の實際生活において自然の情誼としてその行動に現れたと指摘する。この津田の論に啓発されつつ、本稿では、武士の社会的習慣が確固たる概念として十分に成立していない時期、『平家物語』に描かれた武士像を解明することを目的とする。そこで、武士間に見られる情愛的な心情表出を、仮に武士間の「つながり」と定義して、その諸相を明らかにする。本文では、具体的に主従間、兄弟間、敵との間、父子間という四つの関係からそのあり方を考察する。

摘要

《平家物語》里，除佛教思想以外，诸如“忠”，“孝”等具有儒教性质的道德观念也频繁出现。然而，对于物语里所讲述的武士形象，如果还原于佛教或儒教思想来进行考察，则可能看不清武士的本质。津田左右吉认为，战记物（亦称军记物）里道德观念的频繁出现，是源自于这些物语的作者当时的知识分子僧侣。并且指出，那些武士的思想，并非来源于既成的知识及学问，而是在武士的实际生活中作为自然之情谊而体现在其行动中。受启于津田的论述，本文以解明武士的社会习惯作为一种牢固的概念还未充分成立的时期，即《平家物語》里描述的武士形象为目的。把武士间的情感流露，暂定为武士间的“纽带”，来阐明其诸种形象。在正文里，具体从主从关系、兄弟关系、与敌关系、父子关系来进行考察。

はじめに

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」と『平家物語』⁽¹⁾の冒頭に書かれているように、仏教の無常思想が物語を貫いていると一般に言われる。また一方、例えば平重盛が父を諫める言葉⁽²⁾に見られるように、「忠」や「孝」といった儒教的道徳観念が、同書中に多く出現するのも事実である。しかしだからといって、武士を、ストレートに仏教や儒教思想に還元させて考えることもまた、『平家物語』における武士の本質を見失ってしまうことになるだろう。

『平家物語』などの軍記物語に多出する儒教的、仏教的な道徳観念について、津田左右吉は、それは作者が当時の知識人である僧侶であったからだとして主張する⁽³⁾。そして、そうした道徳思想の形成について、津田は次のように述べる。

武士を支配してゐる道徳思想は、彼等自身の生活から自然に生まれたものであつて、外から与へられたもので無く、さうしてそれが教として若しくは信条として組織だてられず、知識としての理論的基礎を有つてゐないのみならず、彼らの間の社会的習慣としてもまだ十分に固定するほどになつてゐないから、厳格なる義務として遵奉せられるよりは自然の情誼として実際の行動に現れるのである。さうして武士の生活そのものが死を期して戦争に従事するのであるから、其の道念、其の特殊の情操も此の間から生まれ、又た生死の関頭に立つ場合に於いて最も著しく發揮せられる。⁽⁴⁾

-
- (1) 『平家物語』は最初からテキストとして存在したわけではなく、たえざる「語り」において、その中身が形成されてきた。テキストが生成されていく中で、数多くの異本が生まれ、諸本のその叙述などに大きな差異も見られる。軍記物語を題材に、そこに表出された武士の姿について考える際、そうしたことがらをも視野に入れるべきだろうが、本稿では、思想的に『平家物語』の武士像を見出す方法を取り、それらの異本の異同の問題には立ち入らない。そこで、引用する『平家物語』の本文は、その行き着いた一つの形態として後世にも大きな影響力を持つ覚一本系統の一本、現在翻刻、活字化されているテキストのうち、高野辰之旧蔵本（通称、高野本、覚一別本）（1371年）を底本とした『新編日本古典文学全集』（小学館、1994年）所収の市古貞次校注・訳『平家物語』①/②を使用することとする。
 - (2) 「悲しき哉君の御ために、奉公の忠をいたさんとすれば、迷慮八万の頂より猶たかき、父の恩恵ちに忘れんとす。痛ましき哉不孝の罪をのがれんと思へば、君の御ために既に不忠の逆臣となりぬべし」（前掲『平家物語』①、137-138頁）。
 - (3) 津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』（三）岩波文庫、1977年（初版は1917年）、113-114頁。
 - (4) 津田前掲書『文学に現はれたる我が国民思想の研究』（三）、114-115頁。

つまり、武士の道德思想は、知識・学問から来たというより、武士の実際生活において自然に生まれたことを、津田が言っている。『平家物語』などの「戦記もの(軍記もの)」に描かれた武士においては、後世にいう「武士道」のごとき概念はまだ発生していないことが、津田の論からうかがえる。

本稿では、このような、武士の社会的習慣が確固たる概念として十分に成立していない時期、『平家物語』に描かれた武士像を、特に主従など、武士と武士との「つながり」のかたち、そこにおける心のあり方に焦点を当てて探してみたい。

1. 武士間の情誼的な「つながり」

前述したように津田は、『平家物語』における武士の「道德思想」を論じて、「武士を支配する思想の根本は情である」⁽⁵⁾と指摘した。この「情」について、津田は、『平家物語』(巻第十一「嗣信最期」)で自分の身代りになって死んだ佐藤嗣信の為に、僧を呼んで弔ってやったことを「情ある振舞」とし、また、女や男のために出家、あるいは入水するのも「情のため」と評している。確かに『平家物語』には、津田の言う通り、「生死の関頭に立つ場合」において武士の言行に現れる自然の情誼的な心のかよい合いが多く示されている。津田はそれを武士の「情」と定義し、主従・父子・夫婦・敵の四組の關係にわたって出現すると指摘したのである。この津田の指摘は重要であるが、ここで確認しておかなければならないのは、『平家物語』本文中、武士について語る場面に「情」という言葉がほとんど出てこないことである。津田の言う「武士の情」とは、『平家物語』における武士間の多様な心のかよわせ方を説明するための、津田独自の用語であったといえよう。

では、津田が用語とした「情」(なさけ/じょう)は具体的に、どのような意味を有するのか。『日本国語大辞典』では、「情(なさけ)」について、「①人間としての感情。人間みのある温かい心。人情。情愛。②他にはたらきかける感情、あわれみ、思いやりなど。好意。懇切。③情趣・風流を理解する洗練された心。みやびごころ。風流心。④ふぜい。おもむき。情趣。趣味。⑤男女がひかれあう心。

(5) 津田前掲書『文学に現はれたる我が国民思想の研究』(三)、117頁。

恋心。愛情。⑥恋愛。情事。好色事」⁽⁶⁾と六つの項目でその意味を解釈している。また、「情(じょう)」については、「①物事に感じて起こる心のはたらき。感情。きもち。②他人を思いやる心。なさげや、まごころ。情愛。③男女間の愛情。情愛。恋情。④本能的な欲望。欲。⑤あじわい。情趣。風情。おもむき。⑥実際の様子。有様。状態。情況。⑦本質。性質」⁽⁷⁾というふうに解釈している。「なさげ」と「じょう」の意味を見比べると、「なさげ」の解釈の中の①、②、④、⑤はそれぞれ、「じょう」に対する解釈の②、①、⑤、③に対応していると見て取れる。このように、「情」の読み方は異なるが、二つの読み方に共通する意味がみられる。また、ここでは一々用例を出さないが、辞書による各解釈の根拠とされる用例を確認すると、『平家物語』からの用例は、「この僧正は優になさげふかき人なり」(巻第六「新院崩御」)に限られている。それもまた武士に関する用例ではないことに注目すべきだろう。また、『平家物語』(覚一本)が成立した時代と関わって、『時代別 国語大辞典 室町時代編四』を確認すると、「情」に対する解釈は「なさげ」のみである⁽⁸⁾。そして前述した『日本国語大辞典』の「なさげ」に対する解釈とさほど変わらない上に、『平家物語』からの用例は全く引かれない。

以上、「情」の辞書的定義を見ても、その意味は多様であり掴みにくいのである。『平家物語』においては、生の言葉として「情」で武士を語る場面が殆ど見当たらないが、一方、武士と武士との間に、前文に挙げた「情」の辞書的定義の①と②に接近する、いわば人間としての暖かい感情あるいは人に対する思いやりや情愛の如きものがその行動からうかがえるのも事実である。そうした武士間に見られる情愛的な心情表出を、仮に武士間の「つながり」と定義して、その諸相を明らかにしよう。ここでは具体的に、主従間、兄弟間、敵との間、父子間という四つの関係からそのあり方を考えてみたい。

(6) 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』(第二版 第十卷)小学館、2001年、148頁。

(7) 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』(第二版 第七卷)小学館、2001年、29頁。

(8) 室町時代語辞典編修委員会『時代別国語大辞典 室町時代編四』(三省堂、2000年)では、「なさげ」について、「①他の人のことを思いやって、いとおしむこと。また、その思いやる気持ち。②自然の趣や人情の機微に触れて、それを感じとるみやびなごころ。また、そのしみじみとした趣・風情や機微。③特に、男女間で通じ合う思い」と解釈している。

2. 主従の「つながり」

木曾義仲と今井兼平の場合

『平家物語』の中で、武士の主従関係について特に注目されるのは、木曾義仲と今井兼平のエピソードである。まず、この主従の「つながり」の特徴について考えてみたい。

源頼朝の木曾義仲追討により、義仲が大軍の中に駆け入って討たれそうになった時、義仲は涙を流して、

「かかるべしとだに知りたりせば、今井を勢田へはやらざらまし。幼少竹馬の昔より、死なば一所で死なんとこそ契りしに、所々でうたれん事こそかなしけれ。今井がゆくゑを聞かばや」⁽⁹⁾

と語ったと記される。「幼少竹馬の昔から、死ぬなら同じところで死のうと約束したのに、別々のところで討たれるのは悲しい。今井の行方を聞きたい」と泣く義仲の姿からは、彼の今井を思う気持ちの切実さが伝わる。特に「幼少竹馬、死の約束」などの言葉から、義仲と今井が幼い頃から固い絆で結ばれていたことが分かる。そして、死の間際の義仲の今井に対する感情からは、他の部下に対するのとは異なった、主従関係を超越した思い入れがうかがえる。その思いが最も明確に表われた部分を引いておこう。

七騎になるまで討ち取られた義仲が、長坂から丹波路に向かうと噂され、あるいは竜花越えて北国へ向かうと噂された中、実は、義仲が今井を求めて勢田の方へ逃げ落ちていく場面。

今井四郎兼平も、八百余騎で勢田をかためたりけるが、わづかに五十騎ばかりにうちなされ、旗をばまかせて、主のおぼつかなきに、みやこへとってかへすほどに、大津の打出の浜にて、木曾殿にゆきあひ奉る。互になか一町ばかりよりそれと見知って、主従駒をはやめて寄りあうたり。木曾殿、今井が手をとって宣ひけるは、「義仲六条河原でいかにもなるべかりつれども、な

(9) 前掲『平家物語』②、174頁。

んぢがゆくゑの恋しさに、おほくの敵の中をかけわって、これまではのがれたるなり」。今井四郎、「御誕まことにかたじけなう候。兼平も勢田で打死仕るべう候ひつれども、御ゆくゑのおぼつかなさに、これまで参つて候」とぞ申しける。⁽¹⁰⁾

八百余騎から五十騎ほどにまで討ち取られた中、今井兼平もまた、義仲が今井を思う気持ちと同様、主人義仲の事を思っていた。そして、一町(約百九メートル)離れた場所からお互いの顔に気付き、急いで相手の前に駆けつけて行く。この義仲の「今井がてをとって」という描写には、単なる主人の侍従に対する気持ちを超えた親愛の情のごときものが描き出されている。後に続く会話からも分かるように、義仲も今井も互いへの思いがあったからこそ、ここまで戦ってきたのであった。主人が侍従を、侍従が主人を思う強い感情が、とうに討死していたはずの二人を、共に死を迎えるまで生きのびさせたのである。

この互いの愛着の情は、二人が死ぬ寸前の行動にも見られる。疲れ果てた義仲は今井と場を共にして討死することを望むが、今井から自害を勧められ、仕方なく馬一騎で粟津の松原に入り自害しようと決める。しかし正月で薄氷が張っており、そこに深田があるとは知らず馬を入れてしまい、馬の頭も泥中に沈み鞭で打っても動かなくなってしまう。そんな危険に瀕しつつも「今井がゆくゑのおぼつかなさに、ふりあふぎ給へる内甲を(……)つひに木曾殿の頸をばとってんげり」⁽¹¹⁾と、今井を心配して振り向いた時、義仲はついに討たれてしまうのである。死に瀕していても侍従である今井を気にし続けた義仲の様子がここに描かれている。一方、主人を庇って踏ん張って戦ってきた今井も主人の討死を知るや、すべての闘志をなくし「太刀のさきを口にふくみ、馬よりさかさまにとび落ち、つらぬかって」(巻第九「木曾最期」)と壮絶な自害⁽¹²⁾を遂げたのである。

上述の場面から、主人である義仲と、侍従である今井兼平の二人の心の結びつきが、並外れて深かったことが見えてくる。主従関係に存した強烈な同志的紐帯について、さらに別の例を挙げて考えてみよう。

(10) 前掲『平家物語』②、176頁。

(11) 前掲『平家物語』②、182頁。

(12) ここの今井の自害は、「名」を揚げるための行為でもあることについて、筆者は論文「『平家物語』における武士の「名」について」(『広島大学日本語教育研究』第25号、2015年)で論じたことがある。

源義経と佐藤嗣信の場合

八島の合戦で、平氏が義経軍を少数と見て反撃に出た際、勇将能登守教経は源義経を射落とそうと狙っていた。源氏方もこれを心得、一騎当千の武士たちが、主人義経が射られぬようにその正面に立ちふさがっていた。そしてその中の一人、佐藤三郎嗣信が「弓手の肩を馬手の脇へつと」射抜かれて重傷を受ける、その場面。

判官は佐藤三郎兵衛を陣のうしろへかきいれさせ、馬よりおり、手をとらへて、「三郎兵衛、いかがおぼゆる」と宣へば、息のしたに申しけるは、「いまはかうと存じ候。「思ひおく事はなきか」と宣へば、「何事をか思ひおき候べき。君の御世にわたらせ給はんを見参らせで、死に候はん事こそ口惜しう覚え候へ。さ候はでは、弓矢とる者の、かたきの矢にあたって死なん事、もとより期する処で候なり。就中に、『源平の御合戦に、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信といひける者、讃岐国八島のいそにて、主の御命にかはり奉ってうたれにけり』と、末代の物語に申されむ事こそ、弓矢とる身には今生の面目、冥途の思出にて候へ」と申しもあへず、ただよわりによわりにければ、判官涙をはらへとながし、「此辺にたつき僧やある」とてたづねいだし、「手負のただいまおちいるに、一日経書いてとぶらへ」とて、黒き馬のふとうたくましいに、黄覆輪の鞍おいて、かの僧にたびにけり。判官五位尉になられし時、五位になして大夫黒とよばれし馬なり。一の谷の鞞越をもこの馬にてぞおとされたりける。弟の四郎兵衛をはじめとして、これを見る兵者共みな涙をながし、「此君の御ために命をうしなはん事、まったく露塵程も惜しからず」とぞ申しける。⁽¹³⁾

自分の身代りとなって重傷を受けた嗣信を見て、義経は前述の例の木曾義仲と同様嗣信の「手をとらへて」話しかける。主人に「思ひおく事はなきか」と聞かれた嗣信は、死後も主人の今後の出世が気にかかること、武士として生まれたからには主人の身替りとして討たれるのは名誉であることを述べる。その後、義経が高僧に頼んで佐藤嗣信を弔おうとしたのは、嗣信のそれまでの行いに加えて、こ

(13) 前掲『平家物語』②、354-355頁。

の死の間際の言葉に感じたゆえでもあろう。さらに義経はその僧に、判官が五位尉になった時、大夫黒と呼ばれ、鴨越での坂落としに自らが騎乗した、大夫黒と称される大変たくましい馬を与える。侍従の死を悼み、それを弔った僧に、貴重な馬を惜しまずに与えたのである。この義経の嗣信に対する思いやふるまいにはたいへん深い感情が入っていただろう。この義経の行為に対し、弟の四郎兵衛をはじめ武士どもはみな涙をながし、「此君の御ために命をうしなはん事、まったく露塵程も惜しからず」と言ったのである。主君の為に命を失った嗣信、そして侍従の為に貴重な財を惜しまぬ義経に見られる主従関係の強い結びつきが、ここでも高く評価されているのである。

このように、『平家物語』では、戦の場面における同志的な主従関係、その「つながり」の強さが高く評価されている。そのことは、主従の「つながり」が逆の場合の描写、評価の姿からも検証できる。

平重衡と後藤盛長の場合

生田森の副将軍、平重衡が梶原景季に追われた時の場面。

究竟の名馬には乗り給へり、もみふせたる馬共おつつくべしともおぼえず、ただのびにのびければ、梶原源太景季、鎧ふんばり立ちあがり、もしやと遠矢によっぴいて射たりけるに、三位中将馬の三頭を窺深に射させて、よわるところに、後藤兵衛盛長、我馬召されなんずとや思ひけん、鞭をあげてぞ落ちて行きける。三位中将これを見て、「いかに盛長、年ごろ日来さはちぎらざりしものを。我をすてていづくへゆくぞ」と宣へども、空聞かずして、鎧につけたる赤印かなぐりすて、ただにげにこそにげたりけれ。⁽¹⁴⁾

平重衡が名馬に乗って、逃げのびていくのを見た梶原景季が万が一と思い、遠矢を引きしぼって射たところ、重衡の馬の三頭が矢に当たった。この時、重衡の家来、後藤兵衛盛長は自分の馬を召されるところか、鞭を振るって逃げて行く。重衡は、「年ごろ日来」の契りを破って自らを裏切った後藤盛長を責めるが、盛長は聞こえぬふりをしてただ逃げて行ったのである。

(14) 前掲『平家物語』②、230-231頁。

ここには、義仲と今井、義経と嗣信の間に見られる主従の心の深い結びつきが存していない。「乳母子」でありながら主人を捨てる盛長の醜態が描かれている。そしてこの盛長の行動は「あなむざんの盛長や。さしも不便にし給ひしに、一所でいかにもならずして、思ひもかけぬ尼公のともしたるにくさよ」(巻第九「重衡生捕」)と非難の的とされるのである。

以上述べてきた三組の武士の場面から分かるように、心の固い絆で結ばれている同志的な主従関係が、『平家物語』には武士のあるべき姿として描き出されているのである。そして、こうした真の人間関係は、武士が実際の戦争場面で特に死に際した時に露呈したものとして描かれているのである。ところで以上の例から見ると、主従の固い結びつきが存した源氏側の武士と、その逆の平氏側の武士という書き分けが『平家物語』において、なされていたということが言い得るかもしれない。それは一面、双方の武士の相異なる出身地盤と生活様態に関係があらう。長年、都の近辺で安逸な貴族生活をしていた平氏側の武士の一部に、源氏方のような固い主従関係を成す要因が欠けていたということはたしかに言い得るであらう⁽¹⁵⁾。そして、主従の関係とは言え、同志的紐帯さえ感得させるこのような固い絆で結ばれた心の「つながり」こそが、『平家物語』の中では高く評価されるのである。

3. 兄弟間の「つながり」

武士と武士との心の「つながり」について、上述した主従の「つながり」の強さが『平家物語』に描き出されている一方、兄弟間においてもそれがテーマとされている。以下は、一の谷の合戦譚の中で河原太郎・二郎兄弟が決死の一番乗りを

(15) 武士の主従関係は単純に男と男の関係を指す。モーリス・パンゲが「多くの場合闘いのなかで鍛えられたがゆえに、結婚の絆よりも緊密なものであった」(モーリス・パンゲ著・竹内信夫訳『自死の日本史』筑摩書房、1986年、167頁)と述べるように、厳しい環境は武士の主従の絆を強くし、快適な生活は同じく主従関係を希薄なものにする。繁栄の絶頂にあった平氏側の武士には、精神面を向上させる外的な要素が欠けていたため、いきなり合戦に直面して、主人の命よりまず自分の身の上の安全を考えたのも道理であろう。それに反し、源氏側の武士は主従一体となって辺鄙な地方の厳しい環境の中で日々を送ってきた。主従同心で苦楽を共にし、気性・生活などあらゆる面で心身ともに鍛えられてきたため、戦という生死を決める際に主人が侍従を思い、侍従が主人を思う気持ちが生自然的な情誼として現れてきたと見ることもできるだろう。

試みて会話を交わした場面である。

河原太郎弟の次郎をようでいひけるは、「大名は我と手をおろさねども、家人の高名をもつて名誉す。われらはみづから手をおろさずはかなひがたし。かたきをまへにおきながら、矢一つだにも射ずしてまちゐたるが、あまりに心もとなう覚ゆるに、高直はまづ城の内へまぎれ入って、一矢射んと思ふなり。されば千万が一つもいきてかへらん事ありがたし。わ殿はのこりとどまって、後の証人にたて」といひければ、河原次郎涙をはらゝとながいて、「口惜しい事をも宣ふ物かな。ただ兄弟二人ある者が、あにをうたせておとどが一人のこりとどまったらば、幾程の栄花をかたもつべき。所々でうたれんよりも、一所でこそいかにもならめ」とて…⁽¹⁶⁾

筆者は別所で考察したように、河原太郎が弟次郎に語った言葉及び後に討死した兄弟二人を評価する平知盛の言葉「あっぱれ剛の者かな。これをこそ一人当千の兵ともいふべけれ」(巻第九「二度の懸」)からは、死後の「名」また家族に「恩賞」を残すため行動する武士の姿が描かれていると言えよう⁽¹⁷⁾。しかし涙ながらに「たった二人の兄弟なのに、兄が打たれて弟が一人で残りどどまったならば、どれだけの栄華を保てようか。別々のところで打たれるよりも、同じ所で最期を遂げよう」と語った弟次郎の言葉の方がむしろ重要である。兄を置き去りにせず同じ場所で討死をしようとする弟の決意には、兄への深い愛がうかがえる。また、先駆けに気がはやる兄も、結局弟の言葉に同意し、一緒に討死したのである。普段から兄弟二人の間に血縁の強い「つながり」があつてこそその出来事と言えるだろう。

4. 敵に対する心遣い

『平家物語』においては、主従間あるいは兄弟間といった関係に、武士と武士との心の「つながり」が鮮明に見られるが、同時に、敵に対する心遣いが強調される面もある。『平家物語』中、「生死の関頭に立つ」闘いの場面で、敵に対する思

(16) 前掲『平家物語』②、213-214頁。

(17) 筆者前掲論文「『平家物語』における武士の「名」について」、参照。

いが際立って表出されるのは、巻第九「敦盛最期」における熊谷直実の平敦盛に対する場面である⁽¹⁸⁾。

一の谷の合戦で平家が負け、助け船に乗って逃げようとした時、熊谷直実が大將軍に出会って取り組みたいと思って馬を進めていたところ、立派な装束の人物に出くわす。

汀にうちあがらんとするところに、おしならべてむずとくんでどうどおち、とっておさへて頸をかかんと甲をおしあふのけてみければ、年十六七ばかりなるが、薄化粧して、かね黒なり。我子の小次郎がよはひ程にて、容顔まことに美麗なりければ、いづくに刀を立つべしもおほえず。「抑いかなる人にてましまし候ぞ。名のらせ給へ。たすけ参らせん」と申せば、「汝はたそ」と問ひ給ふ。⁽¹⁹⁾

組んで落とした敵の頸を取ろうとした時、相手が若く自分の子供小次郎ほどの年齢で美しい容貌であったため心を打たれた熊谷直実、どこに刀を当てても分からず若武者の命を助けようと言う。討つか討たれるかというきわにおいて、かつて一の谷で先陣を志して味方と必死に争った熊谷が(巻第九「一二之懸」、ここでは、我が子を彷彿とさせるという理由で敵の敦盛に対して暖かな思いを投げかけたのである。熊谷は続いて、

「あッばれ、大將軍や。此人一人うち奉ったりとも、まくべきいくさに勝つべきやうもなし。又うち奉らずとも、勝つべきいくさにまくる事もよもあらじ。小二郎がうす手負うたるをだに、直実は心苦しうこそ思ふに、此殿の父、うたれぬと聞いて、いか計かなげき給はんずらん。あはれたすけ奉らばや」と思ひて、うしろをきッと見れば、土肥、梶原五十騎ばかりでつづいたり。熊谷涙をおさへて申しけるは、「たすけ参らせんとは存じ候へども、御方の軍兵雲霞のごとく候。よものがれさせ給はじ。人手にかけ参らせんよ

(18) 敵への思いについて、生死を決める戦闘以外の場面で、源義仲の瀬尾太郎兼康に対する思い(巻第八「瀬尾最期」、源頼朝の平重衡への思い(巻第十「千手前」、源義経の平宗盛に対する思い(巻第十一「腰越」)などはそれである。

(19) 前掲『平家物語』②、233頁。

り、同じく直実が手にかけ参らせて、後の御孝養をこそ仕り候はめ」と申しければ(……)熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀をたつべしともおほえず、目もくれ心もきえはてて、前後不覚におほえけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く――頸をぞかいてンげる。「あはれ、弓矢とる身ほど口惜しかりけるものはなし。武芸の家に生まれずは、何とてかかるうき目をばみるべき。なさけなうもうち奉るものかな」とかきくどき、袖をかほにおしあててさめ――とぞ泣きゐたる。⁽²⁰⁾

と長々と自らの心情のたけを述べる。「小二郎がうす手負うたるをだに、直実は心苦しうこそ思ふに、此殿の父、討たれぬと聞いて、いか計かなげき給はんずらん。あわれたすけ奉らばや」とする述懐からは、敦盛を我が子に思い重ねて、討ちたくないと思う彼の意志が見えてくる。父性愛の心情がそこには読み取れるのだが、注目すべきなのはこの父性愛が、実の子に向けてではなく、若き敵の武者に対して向けられたという点である。

後ろに味方の軍勢が迫り、もはや逃げのびさせることも不可能と判断した熊谷は、「人手にかけ参らせんより、同じく直実が手にかけ参らせて、後の御孝養をこそ仕り候はめ」として、自ら頸を取る決断を下す。と同時に、自身も「いづくに刀をたつべしともおほえず、目もくれ心もきえはてて、前後不覚におほえけれども」と、苦しい立場に置かれることとなる。そして頸を取った後も、「あはれ、弓矢とる身ほど口惜しかりけるものはなし。武芸の家に生まれずは、何とてかかるうき目をばみるべき。なさけなうもうち奉るものかな」と熊谷は泣くのである。この「なさけなうもうち奉るものかな」という言葉に示される、熊谷の自らの行為に対する反省と後悔の心情からは、『平家物語』において重んじられた、武士の精神性的一面が見えてくるだろう。

上述の、弓矢を取る、武芸の家で生まれた自分の職分上に対する絶望感には、そこまででは表現されなかった彼の激しい心理的葛藤が伺える。熊谷において、こうした心理的葛藤は常に表面に出ていたわけではなかった。一の谷の合戦では、先陣の功を得んがため、源氏側の武士同士である平山武者所季重らと激しく争い、決して譲らなかった熊谷の必死の様子が描かれている(巻第九「一二之

(20) 前掲『平家物語』②、233-234頁。

懸)。それがここでは、敵である敦盛にかくも暖かい思いを寄せるのである。子の親でもある我が身で、たまたま我が子のような可愛い敵と出会い、討ちたくないが討たざるを得ないという厳しい局面に際して、熊谷の真の情が流露して、自らの功績よりもそれが重視されたという風に描かれている。元来、武士の内に潜んでいる、敵への「父性愛」という心情が特別な「生死の関頭の場」で、自然の情愛として現れ出てきたのである。

5. 父子の間の心情

次に、「父性愛」の表出について、源氏側の武士である梶原父子の例から考えてみよう。

一の谷の戦いの最中、河原太郎・次郎兄弟が決死の一番乗りを試みて討たれた後、梶原父子についての次のような叙述がある。

次男平次景高、余りにさきをかけんとすすみければ、父の平三使者をたて、「後陣の勢のつづかざらん、さきかけたらん者は、勳賞あるまじき由、大將軍の仰せぞ」といひければ、平次しばしひかへて、「もののふのとりつたへたるあづさ弓ひいては人のかへすものかはと申させ給へ」とて、をめいてかく。「平次うたすな、つづけや者ども。景高うたすな、つづけや者ども」とて(……) さッとひいてぞ出でたりける。いかがしたりけん、其なかに景季は見えざりけり。「いかに源太は、郎等ども」と問ひければ、「ふかいりしてうたれさせ給ひて候ござんめれ」と申す。梶原平三是を聞き、「世にあらんと思ふも子共がため、源太うたせて命いきても何かはせん。かへせや」とてとつてかへす。⁽²¹⁾

先陣を取ることは武士の名誉と関わることであり、梶原次男景高も先駆けの功を立てようとして前に進む。それに対して父の平三は「後陣の勢のつづかざらん、さきかけたらん者は、勳賞あるまじき由」を使者を遣って知らせる。一番乗りを狙って討たれた河原兄弟の事が、平三の心を動揺させたのだろう。ただ一人

(21) 前掲『平家物語』②、215-216頁。

敵陣に入ることが極めて危険なことと平三も承知している。無駄な先陣は「勸賞」の対象ではないという道理を語りつつ、ここからは父の子に対する思いもまた見えてくる。相良亨は『武士道』の中で、「『軍鑑』が、武士の誉としてあげるものはその筆頭が一番槍⁽²²⁾であった(……) 一番槍がなぜ武士の高名の最たるものであるかといえば、それは、もっとも死の危険を犯すからである」⁽²³⁾と記述する。ここで相良が言及の対象とした時代とは異なるが、先陣の一番乗り、一番槍は、死の危険に面しているからこそ、名誉として尊ばれたのであった。ただただ猛進する次男景高の身を案じ、「平次うたすな、つづけや者ども。景高うたすな、つづけや者ども」とある如く、我が子景高を失いたくないとする平三の父性愛がここには表現されている。

またこの平三の父性愛が、平次に対してだけではなく、源太にも及んだことが後文から分かる。戦で先陣をとって功を立てるのは命よりも大事なことであるが、父平三にとっては、「名」よりも子への心情がまさるのである。このように、『平家物語』は時として、名誉より重要であるとされる武士の肉親の心情も描き出すのである。

おわりに

源了圓は名著『義理と人情 日本的心情の一考察』の中で、「日本社会における人間関係とそれを支えた日本人の心情を一しかもそれはとくに傑出した人びとのそれではなく、名もなき民の心情を、「義理と人情」というテーマで描いてみたい」⁽²⁴⁾と述べ、文学作品を多くの題材にとって日本的心情の特質を議論している。しかし、源了圓自身も述べるように、「義理と人情」というテーマが特に問題となったのは近世封建社会においてであった。と同時に源了圓は、「情は「こころ」とも読み、日本では古くから心の中心的役割を演ずるもの、とみなされてきた。この情の他者に向かって発動したすがたが情けであり、共感である」⁽²⁵⁾とも述べている。すなわち、「情」は、「こころ」や「なさけ」という、古来からの日本

(22) 相良亨『武士道』(講談社学術文庫、2010年、初版は、塙書房、1986年)の中で、「一番槍とは一番に敵陣に槍を入れた者、突入した者である」と説明している。

(23) 相良前掲書『武士道』、116頁。

(24) 源了圓『義理と人情 日本的心情の一考察』中公新書、1999年(初版は1969年)、2頁。

(25) 同上。

人の心情に通底するものであることが示唆されている。ここまで、『平家物語』において見てきたように、当時の武士においても、それは「情」という言葉では表現されなかったものの、主従間、兄弟間、敵との関係、父子間において、くり返し、武士らしさの重要な要素として語られたものであった。

主従の「つながり」において、義仲と今井に見られるような、主人と乳母子⁽²⁶⁾の関係は特に濃密なものであった。ここには情誼的結合としての相互への思い入れが見られる。これは同志的紐帯の如きものとして、また義経と嗣信の例からも分かるように、特に源氏側の武士の主従関係において顕著に表わされている。そしてそれらは、「生死の関頭」の際の武士の真の心情として描き出されている。危険な戦場で討死しようとする兄をひとりぼっちにさせまいと共に討ち死にする心情からは、兄弟間の深い「つながり」が見えてくる。熊谷の「敵」敦盛への心情は、本来武士の心底に潜んでいた「なさけ、慈悲」が、特別な場面で初めて自然な情として現れ出てきたのである。父子関係において、親である武士のこのような思いは時に武士の職務との矛盾も露呈させるが、父の子への愛は、その生きる根拠としての第一番目の心情であり、それは時に名誉よりも大事とされるものであったのである。

以上考察したように、武士が語られる場面で、必ずしも概念的な言葉では表現されないが、武士と武士との「つながり」の姿が、「生死の関頭に立つ」場面において、人間同士の暖かな感情や愛、人を思いやる優しい気持ちや心情として、物語中に描き出されているのである。それは、『平家物語』が語ろうとした、一つの武士像として注目して良いだろう。

〔付記〕：本稿は、広島大学大学院教育学研究科博士論文（2016年）、「軍記物語に描き出された武士像－『平家物語』と『太平記』における－」の第3章「『平家物語』における武士間の「つながり」」の内容に若干の修正を加えたものである。

(26) 武士団の場合、「乳母子」は親密な側近として常に行動を共にし、必ず生死を一所にするという固い約束が交わされていた（市古貞次編『平家物語研究事典』明治書院、1978年、「乳母子」を参照、597頁）。『平家物語』における木曾義仲と今井兼平の行動は、その典型的な例であろう。一方、平氏方の主人と乳母子の関係についても、最後に残った知盛との約束（生死を共にする）を違えず、主人と手を取り組んで海に入った乳母子伊賀平内左衛門家長などの姿も語られるが、義仲と今井の例に比べると、その力強さが見えない。